東山古流

生花盛花之栞

特116
201

始

特116
201

家元一笑庵の肖像

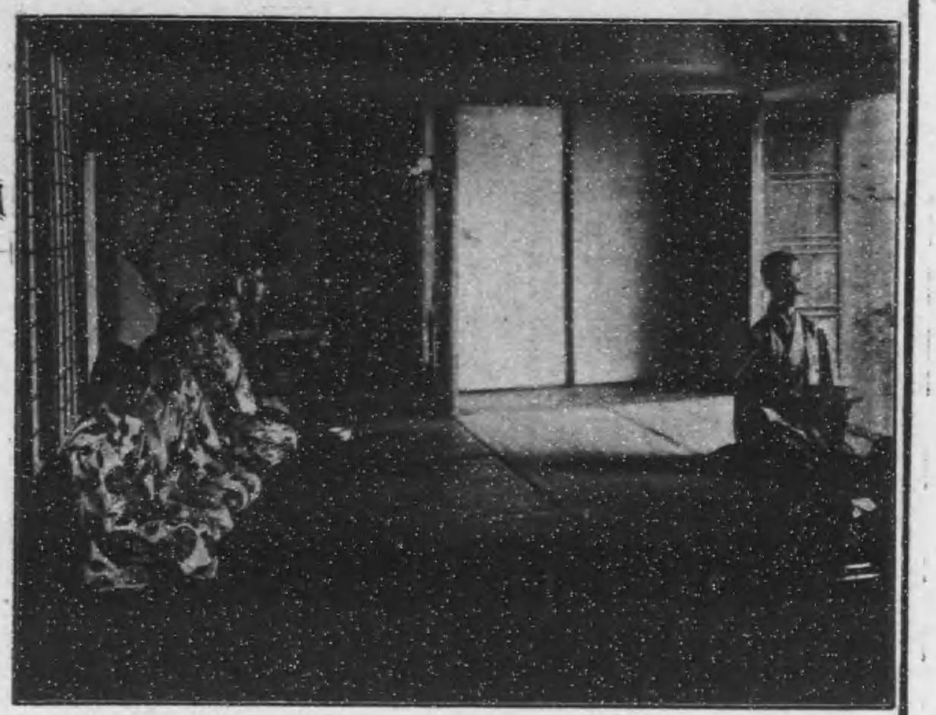
大日本東京花道會顧問役
大日本東山會會長

生花
茶道
盛花
東山古流
十九世家元
一笑庵勝康

大正
14.5.14
内交

夫れ東山古流の源を尋ぬるに人皇五十六代清和天皇の後裔足利尊氏八代の孫征夷大將軍源義政公を以て開祖とす文明年間義政公其の位を長子義尚に讓り玉ひ御落髪あらせられ佛門に歸依し慈照院殿道慶と稱せられ洛東東山に退き一ばら茶華の道に其の丹精を

凝らし玉ひ薀奥を極め玉ふ此を弘く世人に行はしめさせ玉ひぬ其れより爾後代々授受して十九世一笑庵に至るまで同流を學ぶ者其の數を知らず而して開祖義政公より現代一笑庵宗匠に至るまで四百三十八年の實に長歳月を閲し益々發展の機運に向ひつゝあり師は青春有爲にして且又人格高邁なり日夜斯道の發展に努力せられ後進敬慕して其の門に滿てり



茶の湯の圖

東山古流茶道、生花、盛花

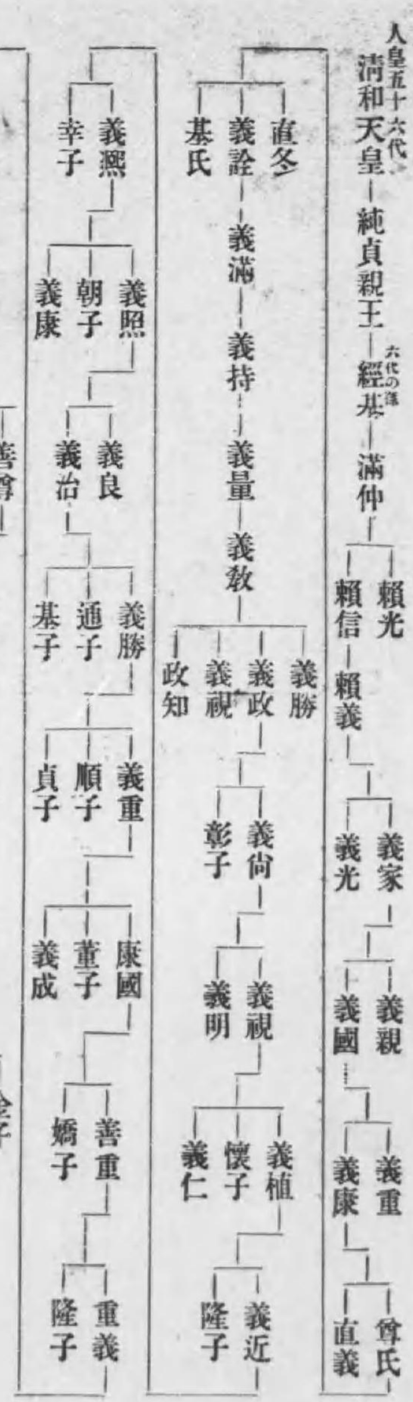
十九世家元　一笑庵勝康

東山古流茶道

調の棚

東山古流家元岡本氏之系圖

中世稱足利氏足利氏者原清和源氏而
八幡公義家之孫義康居上毛足利以也



右之如くにて現代家元一笑庵岡本勝康氏に至りたるものなり

◎古流生花盛花之栞　緒論

今や花道も世の進歩に伴ひて、日に増し月に進むの勢とはなれり、即ち都會の地にありては、各々其門を開きて指南の任にあたる人少なからず、而して其の技も亦秋野の八千草の如く種々あり、試に今二三の例を擧ぐれば立花あり、投込挿あり、作意花あり生花あり又立花に二種ありいづれも針金を用ひて、外面の美を裝ふものなり、其の一は某流の立華にして又一は花輔の製作する葬儀の花なり、投込花にも亦二種ありー一は某流の挿花又一は種々取聚めたる世に云ふ文人花なり作意花には二種あり其の一は古人の風雅を慕ふて込入れば其の法なしといへり又一は自己の發明と稱して奇態異形なるもあり、生花に至りては流儀百端一々枚擧する能はざるも或は形容にのみ拘泥して出生の理に乏しきあり。

今我が古流の生花も其の一にはあれども草木の精神たる出生の原理に基き上下明なる道をさとして姿勢を調ふる教なるが故に師に乏しき地にありては志あるの好士も古流の名を知るのみにして業を得る能はず終に空しく日を經るの遺憾も有らんかとこたび社中の乞はるゝに任せ道の五三を編む事とはなれり、さりながら吾れ蘊奥を極めたると云へどかず多き事なれば或はあやまれる點もあらんが其は後の雅士たち訂正の勞を取り玉はん事を乞ふ、猶いとまあらば次編をも草して口訣のこともらし侍らんが若し志しあらむ人々にして師に乏しとならば先づ此の文にたよりて門庭に入り次々の文ともに求めて入門し玉へかし。

東山古流生花盛花大日本諸國會頭位

壽　笑庵峯松

東山古流

生花盛花栞之目錄

一生花之大意……一
一花器之大意……三
一花配り之事……四
一相應之事……五
一畫面に有る草木は生けざる事……六
一生花拜見之心得……六
一生花は一客限りに取換べき事……七
一禁花之事……八
一禁體之事……九
一五體全備之圖……一三
一兼備三體之圖……一六

一生花は出生を本意とすべき事……一九
一枝掛之大意……二一
一生花に用る木物及草物の大意並に古人生花の圖……二六
一幹の枯止りたるに若梢を添へる圖……三〇
一古人の生花圖して初心の人の參考に示す……三六
一大葉物の大意及四歩六歩物之大意……四五
一蛇腹物の大意……五四
一盛花の緒論……七三
一盛花大意……七四
一盛花花器之大意……七四
一盛花眞之生方……七七
一盛花行之生方……七七
一盛花草之生方……七七
以上

東山古流

生花盛花の栞

◎生花之大意

夫れ生花は凡そ草木の花其の麗しき色又香の芳しきは、是皆自然の しからしむる所以にして必ず人目を樂しましむるなり、然れば美花を多く取り合せ装飾の具となさば、是以て足れりとせんや。

如何に六ッケ敷き法など要せんやと吾答へて曰ん其はその一を知りて未だ其の二を知らざるものと云ふなり。

いかに無法の取合花たりとも、美は美なり、然り而して是無法の物なるが故に假令ば花賣り店に多く列ねて飾りたるにひとし、無教育な

る婦女子が如きは美とも見るならん、心ある人誰かあつて生花と取り違へあらんや、斯くの如きは花の美たるを知るも其の出生其の風致有る事を知らざるものと云ふべし。

美は有形にして見やすしといへど其の風致あるは無形にして草木の精神を云ふに屬し俗眼には見やすからずたとへば人の美服を裝ふたる其の心中はいかに邪惡のなるとも美なる表面は皆美と知る是れ無法なる花は是にひとし況や山水原野の別なく又草木の階級もなくては恰も人の下着を上着にし上着を以て下着とせるが如きもにひとし美は其れ美なりといへども心あらん人々いかで是を賞すべきや凡そ社會の事皆表裏あり即ち是陰陽の理にして離るべからざるものなり而して其の表面は見やすしといへど裏面は見る事かたかるべし。

生花の姿は表面にして出生の理は裏面にあり是れ即ち風致精神なり。

現代盆栽の愛眼せる人少なからず是等の人いかで松を愛せんに其の

好む所皆雅致風情ならざるなし。

唯松にしてあればよしと云ふや否な然らず斯くの如き論理は花にさへあればよろし松にさへあればよろしと云ふが如き理にて取る可き論に非ざるべし。

我が生花の貴ぶ所は姿の雄々しく且又優美にして且つ生氣有り時々刻々其の成長するの相を貴ぶが故に心のかゝみと賞して尊前貴客に供する事を得る生花を研鑽せられん人能く心得知る可き事なり。

◎花器之大意

一花器は凡て地、水との二大より割出せし物なり是皆地の陰に屬し而して吾生花は、地より生じたる相を生け顯すを本意とせる所以なり置花器、懸花器、又廣口、釣物あり、何れも、其の器に相當せざれば、花器、花器に非らず、今や初學の人よ其が大意を示さば、

花は器の力の二倍と見て可ならん。

尤も理りある事なれども此處に略す懸花器の、釘穴あるものは必ず、下に置事を禁ず、廣口は二株生け又は三株生けをなすも何れも相當すれば可なり是を奥道の生方と云ふ

花器は種々あれと大略据樣は、床の中央に据へ前六歩、後四歩の割合に置く可きも、花の大小により隨て定むべし。

又懸物との都合により脇へ置くも苦しからずさりとて此は法則あり右勝手なれば床に向ひて左に置く又左勝手なれば床に向て右に置く可きなり此は懸物の明に見る可きを以てなり。

◎花配り之事

一花配りは通常花の根元を折り瓶口に並べ而して後瓶口の向より手前に三ヶ月形に生け上げたる後ち入るゝを原則とすれど又、また木を用ゆるも苦しからず、此又木を用ゆるとは十八世松月院の時より初まれるとにて此は法則あり他流はまた木を向より手前に入れ又は向より斜に入るれども當流は直一文字に入る即ち向ひて左右に入るなり。但し二重生け三重生の時は此の限りに非らず斜になるとも苦しからず。

廣口物は器の半より向ふの方より左右即ち花の振に隨て生けるなり但し廣口には蟹、龜、蔵、卷水、等を用ひて花を留むるなり、而して又馬盥も斯くの如くして留むるなり。

◎相應之事

一前述の如く花は凡て器と相應せざる可からず而して以て、此の相應せるもの亦床共に相應せざる可からざる事なり、是一席の飾り附はことごとく彼此相應相當して一物體一如する可きが故なり然れども其は主人の心に在る事なれば他家に行きて花生けるには先づ器と相應せしむる事必要なり。

◎畫面にある草木は生けざる事

一畫面にある草木は生けざるを宜しとす何に故に是即ち重復なるが故なり。

但し積功の人は必ず生けずと云ふにも非らず其は皆理あるとなれば初學の人には先づ以て生けざるをよしとす、尤も、目立ざる畫面の類は生るとも可ならんやそは畫面の都合による可きなり。

◎生花拜見之心得

一人の生けたる生花を拜見するには花の正面に座し床前横疊三尺を隔て手をつかへ拜見すべきなり。

其の前後必ず一禮ある可し花器など拜見せんに無斷床前に進み拜見すべからず必ず必ず主人に是より近く拜見仕り度きと斷り許可

を得て近より拜見すべきなり然れども必ず、花器の中を覗き見る事をすべからず、他流は無斷近寄り花器の中を見るよしそは花の留方技術を譽むる爲なりと云ふ他の流は近寄り見るも當流に於ては爲すまじき事なり。

而して瓶中には一點の塵をもなき樣氣を附け可き事なり。

又他人の生けたる花を見てあまり譽め過ぎるはよろしからず、唯うるはしきよしにて感服の樣子に見る可く而して後御うるはしき儀と挨拶致すなり。

◎生花は一客限りに取換べき事

一世間に生花を五日持たせいや十日持せたりなどと誇る人あり大なる心得違なり此は己が技術を誇ると言ふに過ぎず。

毎客必ず新敷き生花なるを馳走とす然れば一回人に供したる殘花

以て他の客に馳走とすれば是れ換言すれば、殘肴殘酒を勸むるにひとしき理なり然れば草木の水揚も一會丈け保てば十分なり。

然るを幾日の中保せたればとて我が流は秘術なりなどと誇るは實に憫然の至りと云ふ可きなり。

隨分十分に水の揚りたるを損せざる樣手早に生ける時は七日十日は能く保つ可しといへども必ず毎客事に取り換ふるを客に對しての第一の馳走と云ふ可なり。

さあれば當流の人々よ前述の儀心得置く事なり。

◎禁花之心得

一凡て植物は山野花園に生い立つといへど賤しき名も雜木雜草を生け又惡臭の物、とげある物、花ばかりの物、葉ばかりの物生るは共に惡し但しぼけは花うるはしき爲めとげあるも是を特に許せり

又風雅なる花なればなり。

而して又生花の名稱に對し花なき物は生けざるも松竹の類は千代守る其の操を愛でて生けるなり。

芽出度時は何時にても生けて苦しからず、又花は見へずとも芽出づる類柳、庭とこなとは寒を、しのぎ既に陽氣を含て發芽するを愛でて此を生くるなり。

◎生花に生けざる禁體有る事

此の如く眞正面に向きたるを禁ず

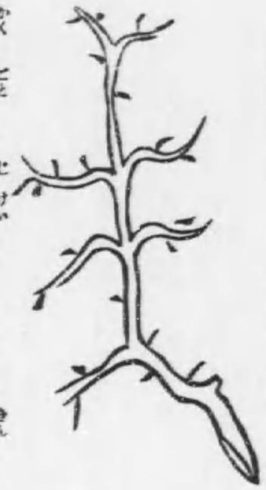
此の如く丈けくらべしたることを禁ず

此の如く花段々階梯の形をなすを禁ず

此の如くくみ合ひたるとを禁ず

此の如く下向きになりたるを禁ず

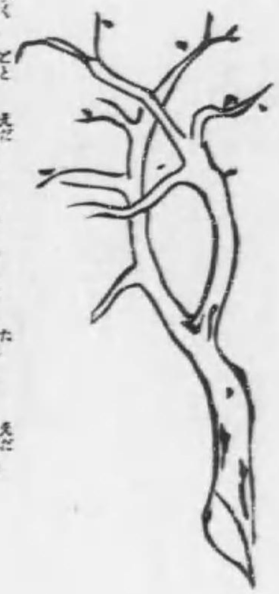
此の如く四角になる花を禁ず



此の如く十字形になりたるを禁ず

此の如く枝さき段々となり丈け比らべし揃へたる等の姿た長競と云ひて是を禁ず

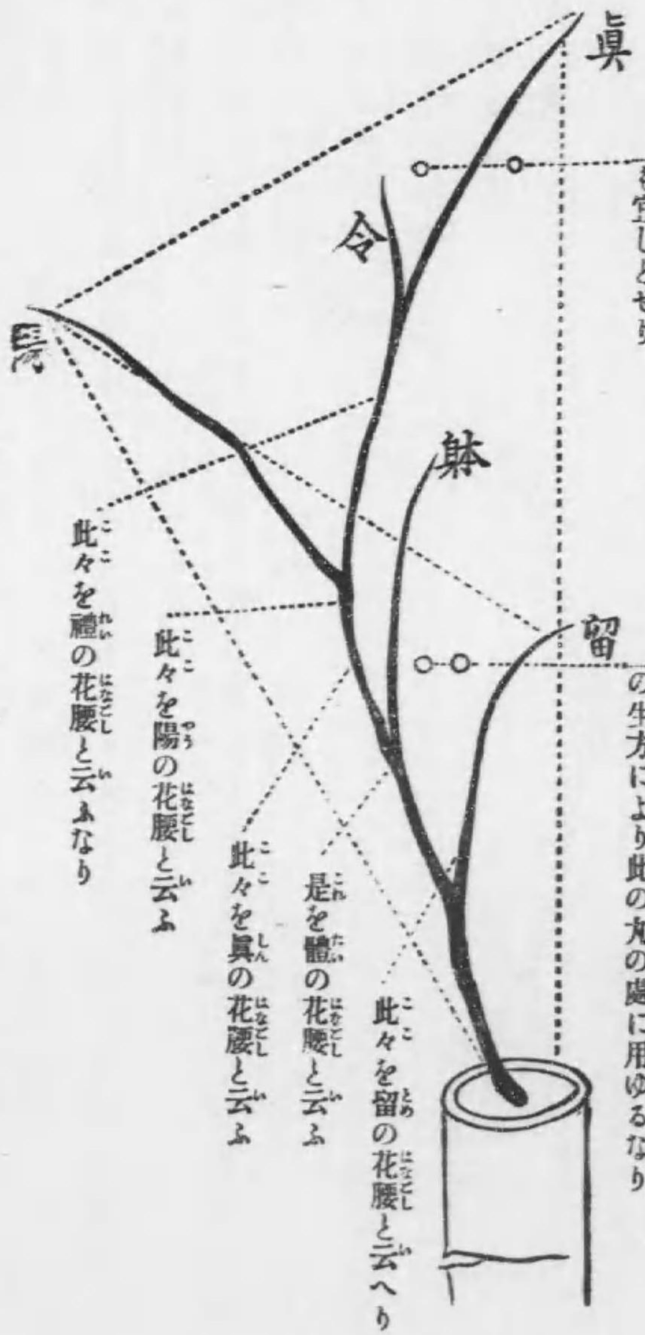
此の如く枝下垂せる或は眞正面へ指出たるを禁ず
但し柳などは下垂せるも敢て差支なし



此の如く枝のもつれたる他より枝の來りて幹を切りたるなど禁ず
但し梅などの縋れ枝は許すとあれど此は上手の作用なり初學の人はなる可く縋れ枝を用ひざる方よろし

此の如く幹と幹との間窓の出來るを忌み嫌へば是を禁せり

◎古流生花五體全備之圖



此の丸の印は花の振り方都合により此丸印の處へ何にしても宜しとせり

此の丸印は上記の如く花の都合により何れにしてもよろし此は又眞、行、草等の各々の生方により此の丸の處に用ゆるなり

此の圖は行の生方に當る圖にして通常眞より習ふを原則とすれど行の花形より習ふを習ひやすしとし初學の人は此の圖によりて研究さるゝ方最易し。

而して此の花形の正面より見て三本正三角形を有す此の三角形の中に禮及び體の枝をも入るるなり。

猶ほ側面より見たる圖を顯して初學の便とす。

斯の如く一花の大體に於ても大三角形にして此の中に小三角三

前面を側面より見たる圖なり

ケを含有す眞、行、草、何れの生方にしても皆三角形を有すなり而して又積功の人は枝かず多く用ゆるも皆三角形の中に屬するなり。

斯くて右圖の如を名づけて本勝手と云ふ（右勝手とも云ふ）

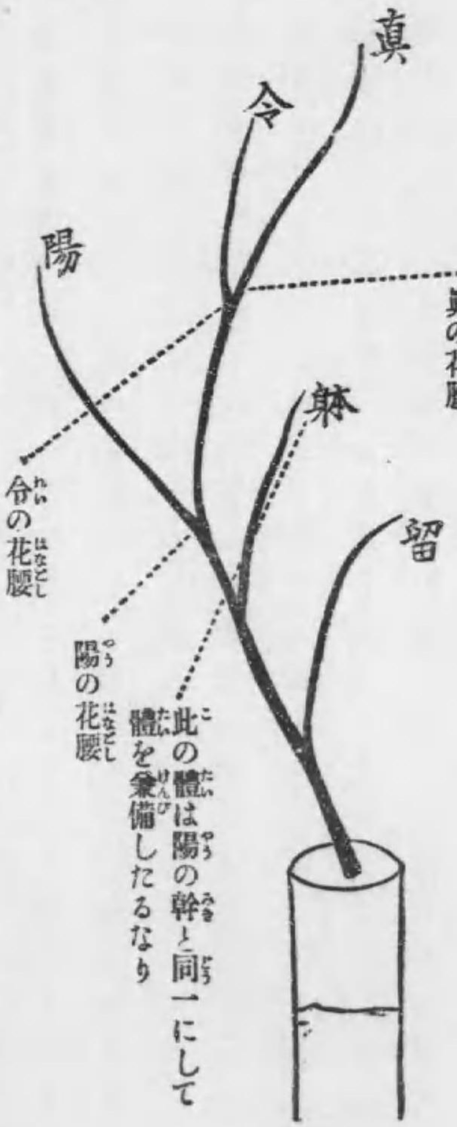
然れば此正反對に生くるを逆勝手と云ふ（左勝手とも云ふ）

而して花體に對し陰陽の別をす即ち「眞」の腹部になる方を陰と名づく「陽」の枝の出でたる方を陽と名づく是れ凡て自然の道理なりかるが故に陽の方へは草木茂り易し陰の方へは草木共に成育しがたくの理を以て生花是にかんがみて陰の方へは枝を用ひず、陽の方へと枝用ひ生くるなり。

五體の枝を名け眞花、令花、陽花、體花、留花と云ふ今詳びらかに言はん眞は眞花と云ふて即ち天なり陽なり、令は風なり陽中の陰にして陽は陰陽和合よりして顯らはるゝ人の如く體は地に對して陰なり、留は水に配當して、是を以て陰中の陽に譬ふなり右の如く種々

に配當するは此の如くなれど留は體の小枝を以てす、令は眞の小枝を以て顯す故に五體即ち三體なり、若し三體に配當する時は「眞令」は一體にして即ち天なり體と陽は一體にして即ち人なり留は即ち地水に配當して是を地と名づくなり。而して當流生花は五體、と三體と同一にして何れも學ぶ可きなり。

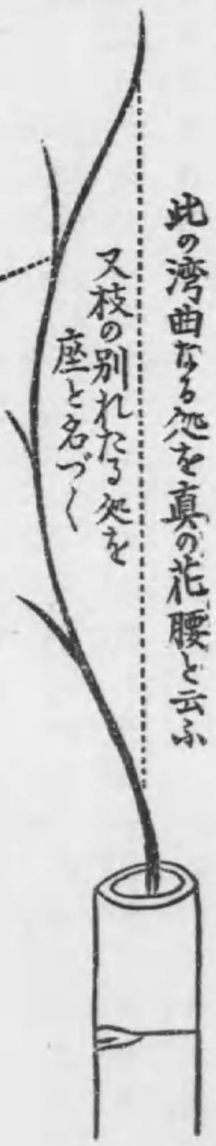
◎古流生花兼備三體之圖



生花に全備と兼備とあり、全備とは役枝一々具へ顯する物にて、兼備とは、形に於て一々顯はさずといへども、理を以て具備するの事にて、生花は業と理とより成りたる事を知らせんなり。

全備と云ふは、五人にて爲すべき事を五人にてなさば是れ全備なり兼備とは五人にてなすべき物を三人にて其の業をなさば是即ち兼備なり、かるが故に兼備は自己の應用熟練を要す事なれば、是積巧の人最も貴ぶ所なり然れども生花は素より莊嚴の道具を以て尊前貴客に供すれば全備なる生花こそ貴けれ即ち全備は書院、床飾に適し兼備なる物は茶席に相當する物と心得て何れも愛玩するべきものなり當流の生花は草木の出生の正直なるを賞して生なすに器は地水の象體有りて地より生じたる相を生るなり故に一種一本にて、五體三體になる可き枝あれば、一本にて生くる事最も、よろしとする處なり然れども一本にて、具はりたるは甚だ稀れなるが故二本三本取り併

せ以て生るなり。



上段眞令の姿

此の湾曲なる処を真の花腰と云ふ

又枝の別れたる処を座と名づく

令の座と云ふ

右の圖は眞令を正面より見たる圖なり。眞令はうるはしき優なるを見立て斯の如くの形に拵しらへて生るなり成べく天然なる枝を見立て用ゆるを良とす。是も天然の如く成りたる枝の上へ向きたるを用ゆべし而し多少は撓

中段陽の姿

此の處を陽の花腰と名づく

め直さゃる可からず。要するに身木に見ぐるしき疵等附けざる樣心がく可し。

下段體、留の姿

是又天然にして右樣の如く疵附けざる樣撓はめ計らふ可し。

◎生花は出生を本意とすべき事

一當流の生花は出生を本意とするが故に天然なるを最もよしとすれど大木の一枝を今此處に伐り取り或は草花にても根を切り離せば幾分器の中に挿入たる時は山野にある時とは大に其の形を變ずなり去ば切取りたるを其の儘器に移すも既に出生とはいはず、是れ

即ち法に依て、各種の出生に基き其の理を辨へ知り、剥々時々成長の相を生け顕はす事なるが故に、本意にはかくるといへど幾分か指南して撓はめ出生に協ふ樣取りなすなり。

而して以て生けんと欲する時は花體を能く考へ定め花、葉損せざる樣心懸け一瓶を生くるとするなり。

譬へば此處に一株の樹木に於る之を他に移植せんに在來の方向を違へ或は一方空氣の流通あしければ此の方に必ず衰損を來たし、一方廣濶の方陽に慕ひ繁茂せんとするは見やすき理なり。

而れば、移植の際、其の陰なる方を切り取り是を植ゑる時は草木の榮を速やかならしむるの道理にて我が生花技の取りあつかひ此の理にひとし。

凡て草木の出生は陰陽五行の働作に基かざるはなし、今一枝伐り取りたる其の儘にては此の三ッの物不具となるが故に三才五行の

理に基きて一瓶を取りなすこそ生花の道なり尤も此の理を詳ならしめん事容易の業に非ざるが故に初は形によりて道に入るを順序

◎枝拵之大意

上段に用むとする原枝

（甲圖）

とすたとへば眞命に用むとする右圖の如き枝あらんに多少指南し而して其の見込を附け假りに○點の處より指南し不用なる△印の枝を切り捨て後撓めんとするに其の太き所は兩手に握り十分掌中に力を

こめゆる〳〵撓さば能く指南出來得るものなり少々音のするほど指南すべし、細き枝は拇指と人指指とにてつまみ芽と芽の間、虫入りなどなき處を指先と指先とにて緩々〳〵指南せば左圖の如く能く撓はめ得るなり。

上段具、令、陽の姿を顯せり。

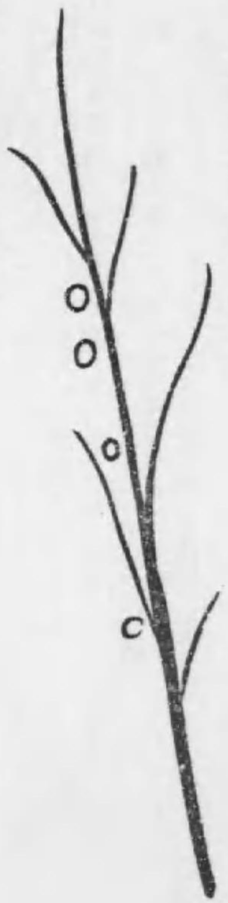
（乙圖）

斯くの如くなりたれば具、陽、令の資格を具備せり。

上段に用ゆべき枝は直ぐに立ちたるをよしとす此處に一本の木あり此の木平扁なる枝にして由し撓はめるも其の風情なし然ればなるべく一樹の幹の如くなりたるものを用ゆる事必要なり。

中段に用ひんとする原枝

（甲圖）



前述の如く不用なる枝は除き後○印の處より指南せんとせば芽と芽の間ゆる〳〵指南して下の乙圖の如くすべし

（乙圖）

中段陽の姿となりたる圖

是を陽の花腰と云ふ

中段陽に用ゆべき枝は上段の眞、合とは彎曲法正反對なれば、初より横に出たる樣な枝を撰ぶ可し、此の枝を横に挽めたる時は其れより生づる小枝は上へ向て出生する故に下枝をば多く用ひざるなり、出生を熟考すべし。

下段に用ひんとする原枝

（甲圖）

體、留に用べき枝は古株より若梢の生じたる姿を出す或は幹より小枝の生たる樣に取成す可し

○印は前述の如く指南する處なり

下段體、留、の姿となりたる枝

（乙圖）

以上三ッの乙圖を組合せて三體五體の姿となるなり次圖のごとし

◎前の三乙圖組合し三體五體の姿となりたる圖

此の五體三體は同一にして即ち天地人なり陰陽五行の理即ち木火土金水宇宙の原則にして凡世の萬物皆此五行の理に基きて循環せざるはなし、かるが故に草木此の形容を本として各出生に任せて生る可し、而て以て當流敎則とする處なり。

但し各出生に隱て多少形容の異なるが如きも生花の原則は更に變る事なし、又圖の如く各體に添枝の附隨するは、中傳に屬して初學の人にはかへつて紛れやすき爲め此處に略す。

◎生花に用る木物草物之大意

一梅、桃、梨子、李杏、柳、庭德、くろもじ等多く若梢の生ずる類は前に記したる五體の法すより伸びたるをも許す事あり、其は三丈物の條下に述ぶるも若梢に付は心得方あり凡そ若梢の生ずる類に若梢なきは行止りたる姿にして成長する姿にあらず、かるが故

に人是を嫌なり、然れとも、行止りに非ずして、頭に若梢の有て他に切り口、枯止りなとなきは、中段より若梢を用ゆるを嫌ふ。

若梢多く生じたる
梅、桃の姿

前圖の如く切株、枯株、止り等有て、其所より生じたる姿に、若梢を用ふ時は身木力らに應ずれば由し幾本、若梢を用ゆるも敢て苦しからず、幹小なれば若梢多く生ずるものに非ざるなり、又若梢は常に身木の中段切り株の處より生じたる姿をなすが故に、幹の前面より添ふる事なし。

若梢を添ふべからざる天然の一枝

此の圖の如く枝先に力ある若梢生じたるは其物直ちに成長する可き

物なるが故に他に折れ口、切口或は枯株等の行き止りたる處なれば別に若梢を添べき必要なし、あるひは下圖の如き若梢更になきものは行き止りたる姿なれば必ず若梢を添ふ可きなり。

凡て若梢は幹となるの初なるが故に是等木物には、一種毎に必ず若梢有るべきを本意とす又是自然の原則なり。

若梢を添ふべき一枝

◎幹の枯止りたるに若梢を添へる圖

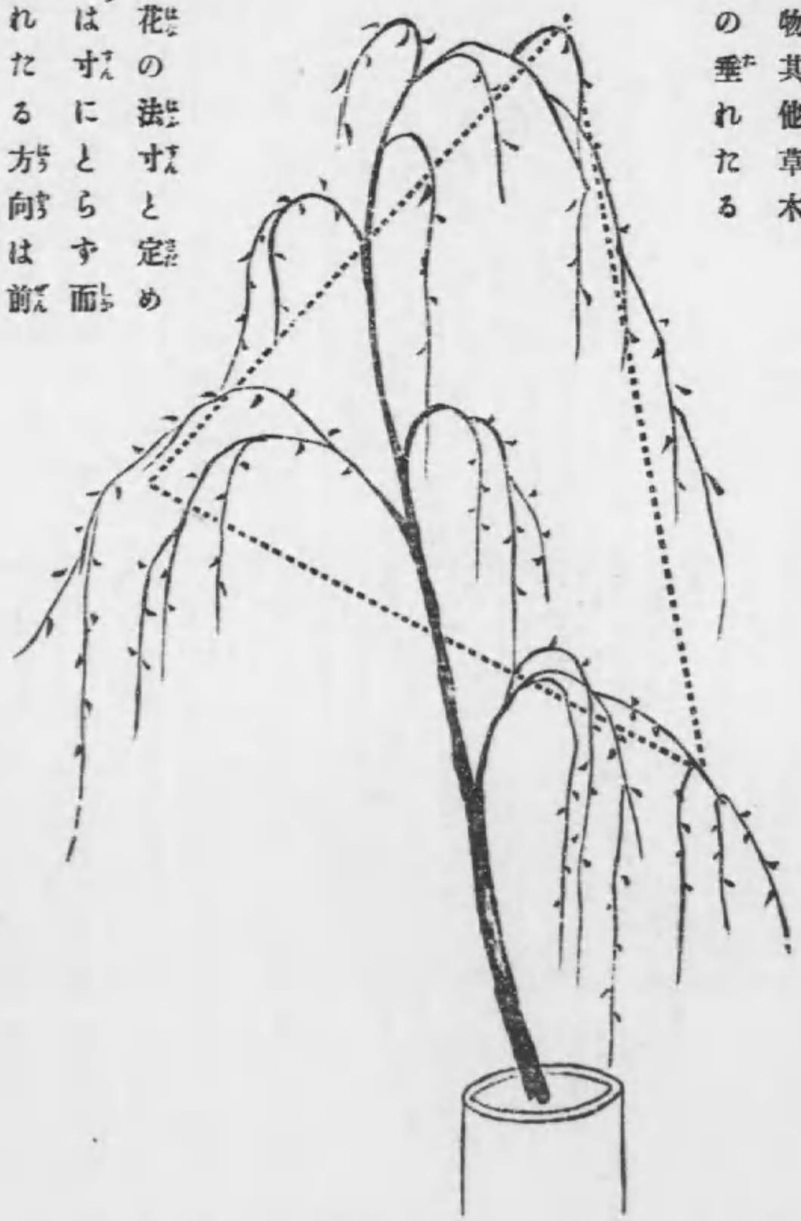
此の圖の如く身木の枯留りに若梢を添ふるは他に若梢有る共苦

しからず又斯くの如き若梢を添へて上段を組立る時は下段の留には必ず根じめを用ゆるべし此等の類は若梢ばかりを生ける事を禁ず幹なしの若梢は花咲くものに非らずかるが故に是を禁ず、但し桃は上に若梢有共中段より枯止り切株等なく共若梢を添えて生けるも苦しからず、桃の出生は梅とはやゝ違ふ所有り。

桃は圖の如く若梢を多く用ひて生ける共苦しからず、是桃は天然に生ずるの姿なればなり。

桃の若梢を多く寄せ生たる圖なり

柳の如き物其他草木の幹及枝の垂れたる物は花體の割合取りがたき物なり是等は競ひ昇りたる處までを花の法寸と定め垂るゝ處は寸にとらず而して其垂れたる方向は前



なれども初學の人々は上段中段下段の枝配りにして上段は後の方へ中段は前の方へ下段は横の方へ枝を配れば自然三角形を顯すなり、斯くして前後三角形の姿を調へば自ら陰陽五行の樣を顯すなり。

而して又枝先は互に相對する樣に生くるなり。

靡き物の生方

一右圖の如き靡物譬へば、緣しだ、はぎ、やまぶき、手まりばな、等は皆なびき物なれども直ぐに伸びたるものは、其の儘生くるも敢て苦しからず。

而して其の法寸は前述の柳の如く其の曲りたる處を以て定む、是等は多く横に生くるを常とすれども、草木の生ずる事は立に生ずるを本體とすれば、生くる事も亦立に生くるを賞すべきなり、然れども立つに生くるは其の風情乏しき爲め是を横に生くるも尤も可なり。

皆是れ出生に應ずる故なれば、朝顔、ふち、等の種即ち蔓物は是れに準じて生ける可きなり。

右ぎ述ぶる懸花の生方は初心の人には少し生け難きも別に六ツかしき事には非らず只だ立生花の横にしたたる樣にひとし左圖の如くなれば、是に對照し研鑽せらるべし、但し圖の如く陽は眞より

長く且又陽は眞の二倍若しくは二倍半になすべきものなり是に從ひて、體、令、留も準す可し。

◎古人の生花圖して初心の人の參考に示す

椿三體の生花

若松若緑ばかり取合せ水引かけたる圖

一松は千歳の操を愛でて生くるなり、故に慶賀の時は何時にても生くるなり而して又此の松の根に他の花あるもの添ふるとも苦しからず。

百合の花は種々あれと斯くの如く変に生くるなり、いづれの百合も生けて可なり。

百合花

但しあまり香氣高き百合は時により差支あり茶の席等には是を生けざるなり。

其は茶の香氣を消せばなり。

芍薬花

花の色には凡て種々あれども色切として一種の色を同種の別の色にてはさみ合ふ事を忌む譬へば白の花を赤と赤にてはさみ合事の如き等なり是東山公の規矩し給ふ所にして初傳拾七ヶ條之卷にあり。

かや

一かや、すゝきの類はいづれも穂をいづる故是即ち花なれども亦他の花を取合せ生るも決して苦しからず。

女郎花

一女郎花男郎花の類は五體の取り合せ方梅、桃などと變はる事なし但し此の種の花には必ず大葉根元に付き生ずるを此の種の自然の出生なれば必ず圖の如く根元に附添ふべし但し他の花と取合せ生くる時はなくとも苦しからず。

一みづひき草は生けやすからず、然れども何づれの地にも多く見得る事なれば此所に圖を示す依て是に見習ひて生く可し。

水引草

菊の花は其の種類甚だ多し而して此菊の花は古より我が國にあると云へども現代の如き美麗なる大りんの菊は中世よりあるものにて是即ち桓武天皇の頃支那、朝鮮より渡來せしものと云ふ。大古は我が河原よもぎ、と稱して俗に云ふ野菊の事なり、是等を古は總稱して、よもぎと云へり。

大菊の花

結梗の花

一結梗も地方に多くある花なれば初學の人も學び得可きなり。而して斯の如きもの凡て手早に生けざれば水下り其の風情を損ずれば、なる可く最初枝振りを能く見立然る後手早に生くるなり。

◎大葉物生方大意

一大葉の物は分ちて、二種となす、一は水物一は陸物なり而して其の組立は、鶴翼なり此の語世に云ふ鳥羽重の姿を云ふ、葉らん、

ばらん七枚の生け方

ぎぼし、紫苑等は陸に生ずる大葉なり。水葵、河骨、蓮、等の如きは水中に生ずる大葉ものなり而して大葉なるが故に隠て、見處も亦多かる可し、故に一葉の中にも、陰陽の作用を顕せども、初心の人には、作用を理解し難し、故に先づ葉三枚以上用ひて、各照し合ふ樣に取合すべし、譬へば、三枚は、天、人、地、と配り、五枚は、五體に配るなり、五枚以上を用ひんと欲せば一瓶中添の少なき處へ、補ない添ふべし。此は七枚の生方なるが要するに五體を能く形どり二枚を、其の谷間の處に添へ生くるなり、最も、此の、二枚は、其々名稱あり一ッは谷と云ふなり、一ッは後添と云ふなり。

一畫面にある、ぎぼしの類多し、然れば花の莖短かきものは圖の如く生けなすなり、又莖ながきものは、四歩六歩の法則により生けなすなり、四歩六歩の法則とは上段を六歩にし又は四歩にする事

を云ふ。

譬へば次圖の紫苑の生方の如く上段六歩に伸び不等邊三角形をなしたるを云ふ、即ち上六歩伸び居るなり、斯くの如き生方を四歩

ぎぼし

六歩の生方と云ふ。

而し此の紫苑は許し物なればまた次編にうつり詳しき事をもらし侍らん。

通常此の圖面の法により生くるなり。

紫苑の生方

一水草大葉もの即ち、蓮、水あをい、河骨などにて而して蓮は浮葉

立葉の扱ひ方あり、陰陽五行の生方等種々あれと其は積功の人のなす業にて初心の人には生け難かるべし此所に略す。而して蓮の出生は宿根より生じて最初浮葉のみ出で其れより次第に根芽を生じ日経るに隠ひて斯くの如く立荷葉を生ずるなり、而して花生じて各節々より茎生ずるなり。

下圖の如く廣口に生くる時は浮葉を用ひる可く又廣口ならざる

蓮と
かきつばた
株分けの圖

時は浮葉なくとも苦しからず、圖の如く必ず二株に生ざればとて蓮のみ生くるも亦苦しからず、水盤、馬盥に生くるも此の法に準じて生なすなり斯くの如き生方を魚道の生方と云ふ。

◎河骨の生方

一河ほねも葉組は蓮の如く眞、陽、留、の葉互に向合せ、一瓶の氣脉よく通じるをよしとす、是即ち、陰、陽、五行の三體なり、花は何れに用ひるも可なり、而し其

の出生に鑑みて又生くるなり、是には又種々の傳も有れど其は初心の人は學び難く師に付きて學ぶをよしとす。

而して此等の水草は水揚六ッかしきものなる故切り取りなば直ちに、其所の水を汲み取り筒に入れ十分揚りたる後其のまゝ井戸の底深き處まで釣り下げ置き客前に持出し手早やに生くるなり。水葵なども是に同じく、水のよく揚りたるを手早に生ける事要用なり、但し水葵は葉莖の本に袋の如き物附着し居る其れより枝の生ずるものなる故其れ以て花の座と定めて然る可く凡て花は、座と花腰により其の姿を裝ふものなれば、花如何に美麗なると雖ども、此の法則に基かざれば、姿見ぐるしきものなり、能く注意すべき事なり。

而し又、ふとゐ、あし、よし等は一年にて丈長大となる物なれば餘り風情なきも此は初節の頃は丈短く又穂をはらみ居る事なれば

三丈物の生方にて、四歩六歩にて又風情あり。

ふとゐ

右圖の如く生くるなり、但し是れ初期と盛期と殘期と三期の法則により生なすなり。

是等の類は直立するを出生とすれば、餘り指南して撓める事よろしからず、自然のまゝ生くる事最もよろしかる可し。

眞花に花を多く用ふるは殘期の法にして此の上伸ざる姿なればなり、斯くの如き場合は必ず留に花ある物を取合すべし。

是等のものは、凡て、夏季の花なれば廣口又は水盤、馬盥、等に生なすを最も風情あるべし。

蘆とかきつばた

葭、芦、の類は皆直ぐなる物なれば、花腰取りがたき物なり、然れば、葉を夫々の座に置けば、各體とも、姿はなくとも見分け附

くべし。

前圖の如く、芦にかきつばた、の取合せなり。

是又四歩六歩の法則により生るなり、而して株分けにして生くるも可なり。

以上一年にて成長し大に伸立つ物なれば概略此の如し。

◎蛇腹もののの大意

一蛇腹ものには、平蛇腹、向合蛇腹の差別あり。

平蛇腹ものには、先づ燕子花、一八、花菖蒲、鳶尾射干、等なり

芒などは、向合蛇腹なり。

岩石蘭の類又向合蛇腹なり各々出生に鑑みて生くべし。

右之如く種々あれども、蛇腹組直して取扱ふものは、燕子花、一八などの種類にして其の他は其のまゝ生け得べくして組合直す必

要なければ此處に略す。

一燕子花、一八等花の生せざる時は葉はいつも下圖の如く蛇腹なり

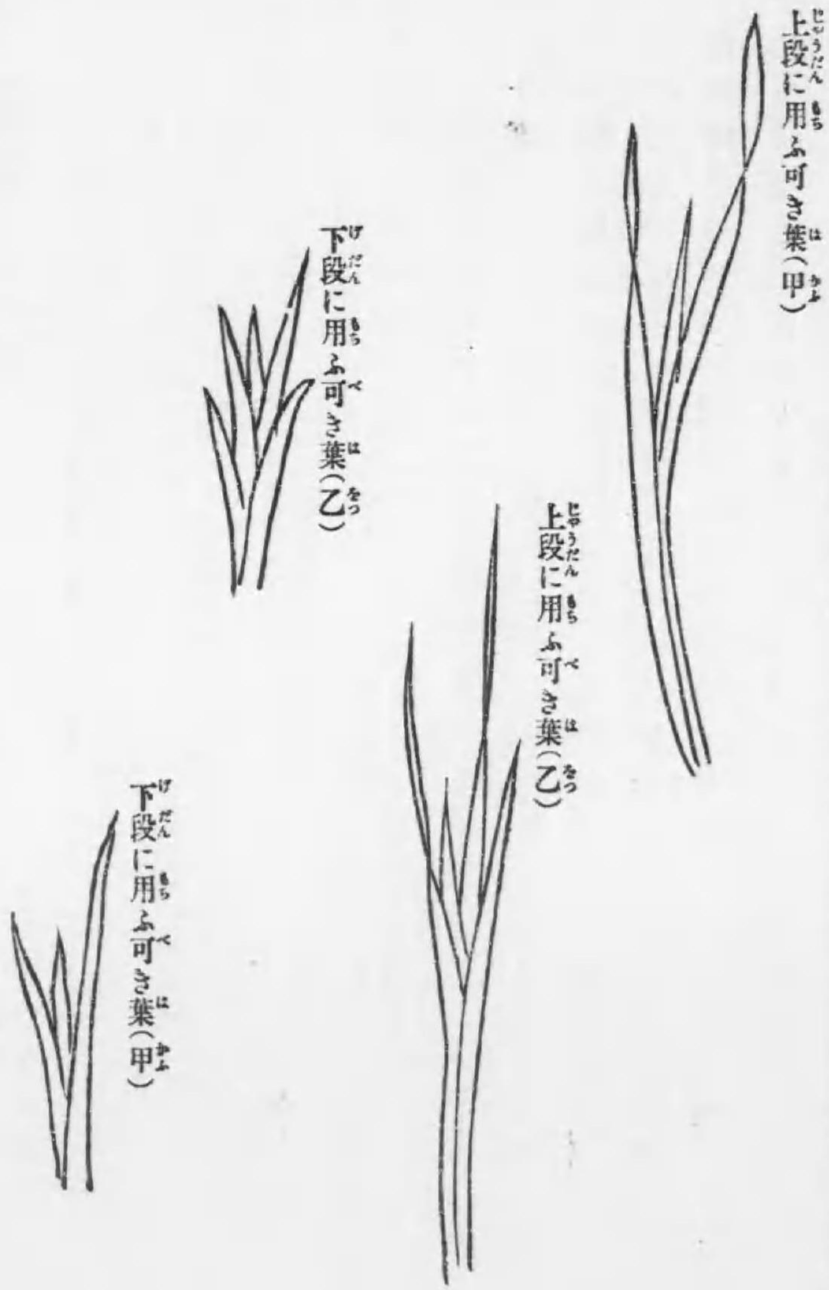
初花の珍花は花生ずるも、花茎伸びずして、組ばの口に咲く相に生くれど、追々盛花の季に到るに從ひ、花茎共に伸ぶ、又伸ぶるに從ひ傍葉となり、蛇腹は、僅に水際低く殘るなり、初花は切り取る花に組葉附着し居り盛花は切り取らば水際の蛇腹解けて花茎と葉と別々になり傍葉のみ、茎に殘り附くもの多し。かるが故に盛花に生くる時は、花の生じたる葉の殘る蛇ばらはなきものと見ても苦しからず初花の中にも、初、盛、殘、は組葉の中高より花の苞が或は傍葉に爪先を合せて、花茎短く用ひ、盛花は是にも、初、盛、殘、あ

平蛇腹出生の姿

れど、未だ花の生ずる中は、中低くして、眞葉ある一組或は、二組用ひて此の葉に關せず、傍葉代用の葉を添へて用ふべし、以上は春の中頃より咲き出づる花と夏の花とに就て言へるなり、又處によりては夏の花のみ咲くあり斯くの如きは、一期の中に初期、盛期、殘期、の別あり。

斯くの如く三期に花ある故に初、盛、殘期と區別し尙ほ初花にも初盛殘あり盛期殘期にも、初盛殘あり、かるが故に九級に別ち各〻出生時季に應じて生けざる可からざるなり、然れども土地により寒暖の都合に依り、初期の時季に殘花あり殘期の時季に盛花あり故に季節のみにては論じ難し、然れば花の出生姿に依て生けざる可からざるなり。

今此處に初學の人の爲に葉組の方法を示し置かん、是により初、盛、殘、の大意を知るべし。



中段に用ふ可き葉(甲)

中段に用ふ可き葉(乙)

右葉組は根本及び爪先きも能く向合せ、最も表裏を能く正し、組合すべし、而して甲圖は花未生の姿にして必ず眞葉の短きを中に添ふ可し。

乙圖は花の未だ生せざる姿なれど此の姿は中の眞葉を除きて一番

長き葉の爪先に合せ傍葉有る樣を顯し、花を向ふ裏より附着せしめ花莖見えずして葉の組合口に花を見するを初花とす、少し莖の見ゆるは初花の中の盛花大に見ゆるを、初花中の殘花とす、又右の甲乙共に花を遣はざる時は三期何れの時も姿を調ふる爲め用ひて可なりとす、短き眞葉は眞中に用ゆ故に未だ花生せざるなり、故に成長する姿なればなり、初心の人は此の形より學びて追々進みて蘊奥を極むべし。

右甲、乙の組葉を利用して初花の姿を組立生たるなり

初花は斯くの如く花莖短く組葉の口に咲きたるをよしとす、而して葉も若々しき葉を要す、珍花の時は先づ一莖用ふを宜しく、されど一輪生けは、意味深くして初心の人には許すべからざれと花數多ければ綿り難く留りがたければ形を得る爲めに初めは一輪を以て生け習ふも苦しからず一の法便なり、而して形を得るに隨ひ二輪三輪と生くるなり。

此の陽の一組は中高三枚にして即ち花の生じたる葉なり、若し體留に花を用ふる時は體、留、の五枚又は三枚たり共中高くし花の生じたる葉に用ひる可し、而して又葉幾枚組むとも中高くすべし、是三季を分ち三期中春に屬する初花の用ひ方なり。

此の初花の中にも二輪三輪遺ふ事あり其は葉の伸立ちに於てなり初花にも初めは短く日を經、葉伸るに隨ひ花も追々上段に用ひる事と知る可きなり。

此の下圖の花體も二、三輪用ひるを宜しとすれど初心の人の學びやすきが爲めに先づ一輪生けの姿より入るなり、此の花體も花數用ふ時は上、中、下の三段に分ち用ふなり、されど此の期中の花には曲花、曲葉を遺はず凡て若々しき葉を用ふるをよしとせり。

あやめ、鳶尾、一八、の類も、かきつばた、の如く蛇腹物なれば、是らは、花の咲くこと一時にて初、盛、殘期の三期あれと、月數僅かなれば咲仕舞となる故先づ花莖の長短に注意すべし。

あやめ、は葉細くして初心の人の手にばなりがたし、鳶尾は葉强

乙の葉を用ひ初期の盛花を生けたる姿なり

しといへど反て生け難し、仍て初心の人は、「かきつばた」を以て修行し能く生け得るに至りて右の、あやめ、鳶尾、等をも生くべし、其の又詳しき事は次編に顕はすべし。

燕子花の花の用ひ方、葉の用ひ方大要前述の如し尚ほ、初、盛、殘期の大別なる生方圖を以て初心の人の爲めに示すなり。

此の他珍花、殘花の極意あれど其は積功の人にあらざれば生け難かる可し、極珍花は至つて葉短かく且つやはらかにして組直しなど出來がたく、されば初心の人には容易ならざる業なり。

極く殘花も亦至つて短く葉も亦破れざるは稀にして是又初心の人には用ひ難し積功の上なるべし。

初花の花一輪葉九枚の姿なり

此は初花の體或は留に置く是最も初花中初花にして此くの如く生くるなり

花一輪と葉十一枚盛花の生方にして盛花は二期即ち夏の盛りを云ふ花には傍葉あれば蛇ばらなくともよろし

下圖又盛花の姿にして、上、下二段に花を配りたる生方なり此の花も花の生じたる葉は蛇腹崩れて伸び僅に傍葉のみ花莖に附きて出たる故に葉組は三枚中中低の法にして且つ眞葉を具し中より葉或は、花の生ずる相なり、是全く伸立つるものなる故爪の向き違はず相對す花の苞とも向合はすなり。

是も花の前の葉を以て花の生じたる葉と用ふる時は中高三林以上組まざる可らず、又前の葉の中低の用ひ方は花の生じたる葉にはならざるなり。

然れば圖の如く花莖に傍葉有るか若しくば代理の葉を用ゆ可し、是れ莖の締りを能くせん術なり。殘花に至ては素より組葉の中より花を出さずともよし、花莖は葉より上に出づるが故に傍葉あるをよしとす、若し傍葉なくて立伸ぶるが如きは代理の葉を用ふべし。但し積功の人は種々の生方すれと初心の人は必ず法則に依て習ふをよしとす。殘花は、花莖高く伸出るといへ共是のみにて殘花と云ひ難し、花葉共殘花は違ふ處あり花莖は盛花にも立伸

ぶるもの有り葉にて見分くる時は初花の候は葉軟弱にして盛花の時は麗はしく殘花は葉色濃く且つ強く堅かるべし、季節により必ず曲葉、枯葉等必ず用ふべし、是れ自然の理なればなり。

而して又蜘蛛の綴り、或は切り株を遣ふ可し、去りながら初心の人には此の生け別け出來がたければ此の限りあらずとも可なり。

前述べたる如く三期圖の法則によりて花も一輪より二輪三輪と生け習ひ、葉も五葉、七葉と順次に增して五體の花形を學び習熟したる後ち曲體の變化及び兼備、の妙味を知る可きなり、左圖は花三本葉十五葉實に優美の花體なり。

初學の人も此の花體を容易く生け得らるゝに至れば我が生花の正風の規矩たる花體に熟したると云ふべし。

左の圖は第二期夏季の盛花中の殘花にして、いと優美なるを賞す可し。

一水仙は冬期に至りて花咲き色も樣々あれど古來のものは白花なり而して葉四枚を一株とし其れより花出づるなり、即ち是れ陰なり陽は花なく三枚なり、若し此の法にはづれ三枚の株より花出づる

時は其は不具の花なり、然して此の理に基き陰の株は四枚六枚にす可し、陽の葉は三枚、五枚に取りなすなり、かゝる法則により花體を取り合はすなり、而して水仙の出生は向合蛇腹ものに類す、然れども僅か根本のみにて上部に至り重り合ふ處は諸士の知る處なり、然れば二枚づつ重ね葉面を向ひ合せにすべし、又根元には白き袴あり是必ずなからざる可からざるものなり、而して生け上げたる時花器の口より五六歩計り此の袴の見ゆる樣に生けるなり、此れ出生なれば水仙に花起す傳と稱する事有り、多くの花下向きなる故一瓶の花皆下向きなる時は風情少なき爲め一瓶中一二輪起きたる花あるを見立組合すなり、然して又開花と莟と同時にあるもの故開花のみ數に取りて、陰、陽、の數とすべし、而して能く調和せしむる事肝要なり、水仙にも初、盛、殘、の三期あり、然れども地方に因て大に遲速あり故に季節を以て定め難し、

開花の遲速に任せ、或は花莖の長短に基きて見立つる可し、譬へば葉の中に莟のみ僅にみゆるは是れ初花なり、伸びて開花と莟と同じくして姿麗しくなりたる時は盛花の時期なり、葉花ひとしく伸びたる時は殘花の期なり、而して是又曲葉、折れ葉等其の出生に鑑みて用ゆべし、水仙は單瓣と重瓣とあり、何づれも生くるなり、然れども、花品は單へのもの勝れあれば生花には多く單へを好む處なり。

水仙は野に在る時は、葉亂れやすきものにて、左右に開き直に立ちたるは少なし、然れば、叢生する中の直ぐなを撰び生花に用ゆなり、尙ほ取扱ひ方右圖の如くなすべし。

此の根の白き袴の如き筒の處を手平にて徐々にもみ、やはらめて而して後花莖より順次にぬきて一本づつになし、而して後組み直し後此の白き筒を本の出生の如く根はめるなり。此くの如く解きて撓めるなり、なる可く白き根元の處にて指南すべし、而して葉全面に渡り白き微細なる粉末を有する故此の白き粉を取れざる樣注意し扱ふなり、此の粉落ちたる時は葉に光を生じ見ぐるしく成る物なれば、能々注意す可き事なり若し青き葉の處にて撓めす事ある時は兩端を持ちて取扱ふ可し、但し見えざる處は此の限りにあらず、勝手に指南するも敢て苦しからす、さりとて造花の如く作る事如何に美に生くる爲とて其は許

葉を拔き取りたる圖

さす、當流は最初より天然出生を守ると云ふのが原則なればなり。然して殊更に拵らへたる時は其の風致を失ふ事あればなり。されば又初心の人には本勝手より生け習ふ事易し、逆勝手は、生けがたかる可し、其は積功の人に至れば何れの勝手とも、自在になるものにて又種々の生方もなす事易かる可し。

水仙は兩々相對する葉は凡て長短少なきものなれば一株にて餘り甚だしき長短は致さざる事よろしかる可し、而して花は上段、中段、下段に分け何れに花を持すとも出生に任せて配り入る可し。此の如く取り扱ひなし難きものなるが故に初めは花の有る一株を持ち、眞或は陽に働かせ、體、留、には葉ばかり三枚を一株として生け習ひ又は上下に花を用ひ葉數八を以て一花體とし尙習得したれば三本花あるをも生くるなり。

前にも葉二枚あれば、後にも必ず二枚有る物故、數多く用ゆる時

は片見葉を用ゆ、此は後の二枚は見えざる形にて、熟達の人のする業なり、此の形に幾本にても挿けるなり、此の上又片見葉二枚を令に用ひ體に用ひ花共に添ふるなり、或ひは體と留とに葉三枚の陽の株を用ひる事あるべし、而して又此の外七株の生方、九株、十一株の生方等あれど其は初心の人の却て紛らはしき爲め次編にもらさん故に此處に略す

水仙三株五體に生けたる圖
眞と令は一株にして體、留又一株にあり是兼備の生方なり

◎盛花緒論

夫れ、盛花は古より在來の物にあらず是即ち世の進歩に隨ひ案出されたるものなり、將た文明のもたらし來る處なり。

昨今何處に至るも大に其の盛に行はる事を實現する處なり。

我が流にては祖先義政公より傳はれるものに非ず是今を去る安政の頃即ち當流十八世の家元岡本松月院殿康重殿がたま〳〵洋花を見るに付け如何にも愛らしき又麗はしき花少なからず然れども此の花等は凡て花莖短かく生けん術もなく又當流の定めとして日本古有の出生賤しからざる正しき花を生くるを原則としあるが故如何せん術もなし、去りとて鉢植のまゝ床に飾ざるも又宜べからず。

去りとて是を捨がたく日夜種々辛苦の結果遂に今日の如き麗しき形を編み出されたるものなり、其の辛苦いかばかりぞや實に察するに

餘り有り、是此の盛花こそ現代理想の花なりと云ふべけんや。

◎盛花の大意

夫盛花は前述の生花とは稍々趣きを異にする如く一見すれども此は然らず、即ち草木の花麗しき事天工のしからしむる處にして、其の麗しき花、山にあり、又原野にあり、其のあるがまゝ器に移し尙も山野に見し俤をも忍ばする妙味こそ盛花の特色といはまし、是生花とは形を異にするといへども其の趣は同一にして尙妙味深かるべし

◎花器の大意

一花器は砂鉢、或は籠、水盤等なり。

而して籠を除く他砂鉢、水盤には岩をあしらい生くる事あり此を風致生けと云ふ。即ち山野、原水の風致を此處に顯はせばなり。

而して籠には岩などは用ひず、草、の三種別に盛生くるなり。

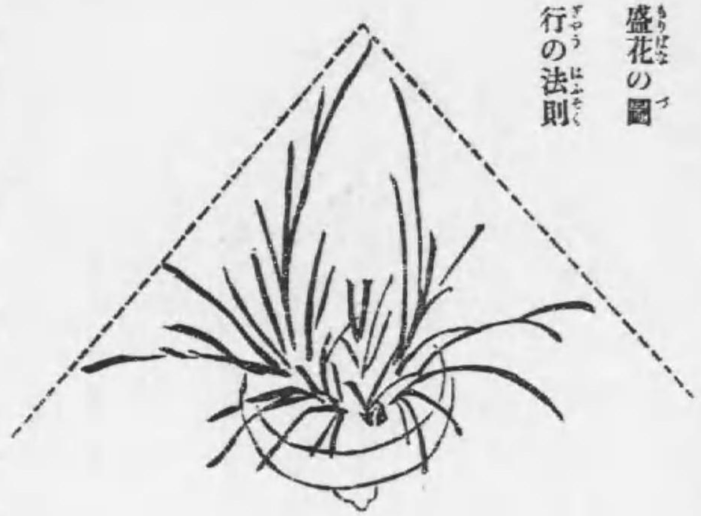
水盤、砂鉢等にも亦岩石を用ひず原則に隨ひ生くるも苦しからず

左圖の如く三角形になる可し。

行の法則

只だ山、岡、谷三則に基き眞、行

盛花の圖
行の法則

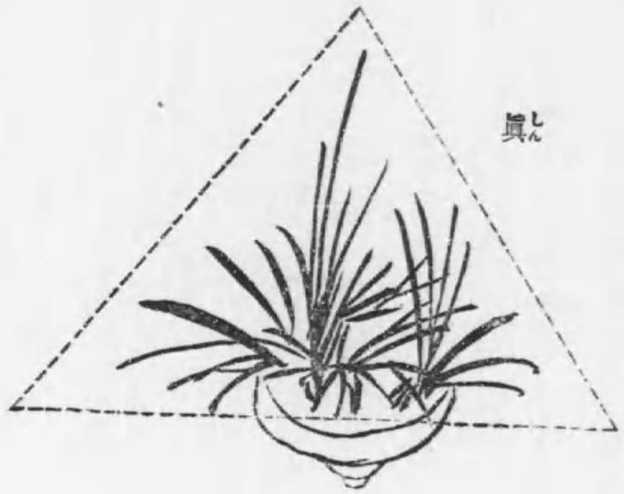


風致生けの圖
行の法則

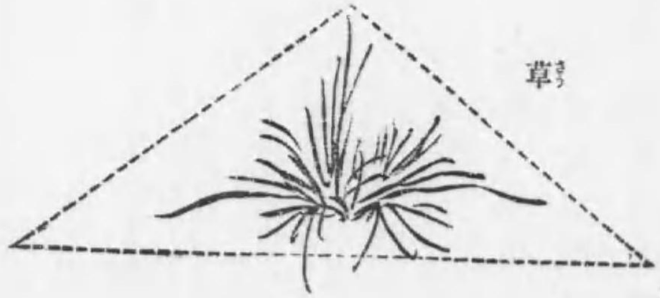
一此の盛花の法則は眞の生方は中高にして即ち山を高くし岡の花さきをみじかくするなり、谷は四ヶ所出來る樣生けべし、而れば、

眞と草は四方面を作り出すべし。

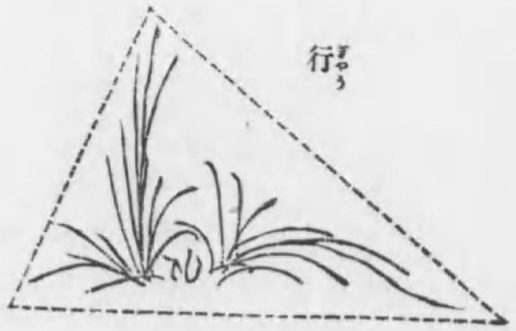
眞



草



行



眞、草、は岡四ッ谷四ッ山は一つなり。

行の生け方は山一ッ谷三ッ岡二ッなり、而れば眞、草は共に四方面にある故何處に置くとも亦何づれの方面より見るとも同じ樣取りなすべし。

行は三面にして後一方作り三面より見るも同じ如く生けなすなり而れば日本式の床には適す。

眞は立華風に似て又草も背低く麗しく生けなす故に洋風の間等に用ひて適す、而して又色の配合を第一とす、其の配合惡ければ花引立たず却て俗に見ゆればなり、又生花には禁忌禁花あれども盛花に於てはかゝる事なし、但し色分けする時に於ては生花の時と同じく白、紫、黃、青、赤、此の順序に生くるなり、此の色分けは生花の時も同じ、白は清淨なるが故に位の上に立つ、紫は古より色々の古事あり、譬へば松上に紫雲たなびくとか、總て目出度き事に用ゆ古事にして古來紫を以て色の王とせり、かるが故に凡そ高位高官の人、僧侶の如きも紫衣ハ位高からざれば着する事を許さずとあるが如くなり、床幕の色も家元或ハ家元師範の者ならざれば是を許さず、まだ色分の事に付色々古事理由あれど其は他日もらし侍らん。

右述べ來るが如く大略斯の如し、色分け等能く心得可き事なり。

東山流 生花盛花之栞（終）

284
398

大正十四年四月二十五日印刷
大正十四年五月一日發行

〔定價金壹圓〕

著者　壽笑庵峰松

發行者　大阪市南區鰻谷中之町二百二十四番屋敷　樋口源次郎

印刷者　大阪市南區北炭屋町二十番地　八十島米次郎

不許複製

東山古流生花盛花之栞

發賣元　大阪市南區三休橋鰻谷南へ入西側　樋口隆文館
電話南六七九九番
振替口座大阪八七九七番

終